

東洋の巨人

嶋川 弘

一九六二・九・一八。六本木材木町にあったしゃれた木造アパートに「東洋の巨人」の関係者が集まった。記念撮影のためだった。今から四十七年前の秋の日、東京の空はどこまでも続く青空が広がっていた。高度成長期、東京オリンピック開催も間近に迫っていた。

世界のトップ報道カメラマン、ユージン・スミスが日本からアメリカに帰国する日。

「安かろう、悪かろう」の日本製品のイメージ改善と正しい評価、日本産業界の名誉のために世界に仕掛けた、松田妙子のPR戦略の成果が問われる日も近づいていた。

妙子はアメリカから、PRという、新たな経営手法を初めて持ち込んだ女性だ。

日本の復興に懸ける夢は男以上のものがあつた。中田は初めてPRという言葉で妙子から聞いた。

「広告」とはお金を払ってバイミーと自分を表現すること、「PR」はタダで、ラブミーと記事で紹介することだと力説していた。

中田は「凄い！」と感動した。

しかし勉強するにも本もない。妙子の御主人の佐藤啓一郎が、そんな中田に一冊の本を貸してくれた。黄色い表紙の部厚い本。英語でぎつしりと難しいことを書いてある。

「PR・IN・PROFIT」とタイトルがついていた。中田の運命を決定した一冊。中田は辞書を片手に深夜まで読みあさった。

日本最大のH製作所、まさに東洋の巨人を世界にPRするといふ、壮大な計画がスタートした。妙子の戦略が成功するかどうか、まだ信じている人は少なかったが、中田は日本のためにもそのプロジェクトが成功することを心から願っていた。妙子の成功を信じた。

妙子は若い中田の勉強のためもあって、ユージン・スミスの来日時から、彼の身のまわりの世話役を中田に命じた。

妙子の父親、松田竹千代は岸内閣時に文部大臣の要職にあつた。中田は竹千代の使い走りをも兼ねていたので、毎日が目のまわるような時間を過ごしていた。充実した日々だった。

竹千代ほど偉大な人間はいないと、中田は走りまわった記憶が

甦ってきた。中田が戦争遺児であることを知っている竹千代は、この他、中田をかわいがってくれたようだ。それに反して妙子は中田の教育に厳しかった。

——プロジェクト「東洋の巨人」に懸ける意欲は並々ならぬ気迫があった。

世界的カメラマン、ユージン・スミスは気難しい性格、写真が全てだった。中田も部屋の掃除やら何やら、ユージン・スミスの機嫌をそこねないよう、気配りに明け暮れた。助手には日本の代表的カメラマン、三木淳や若手カメラマンが数名ついた。スミスの妻キャロルも大変だったと思う。

ある日、スミスはH製作所のタービン工場を撮影した時、足を骨折するという事故にあった。自分の欲しいカメラアングルを追って足を骨折したのさえ気づかなかったのだ。中田はこの時、一流プロの怖さを知った。今のイチローにも漂う、神の持つ不思議な力の存在を感じた。プロの美学だと思った。

妙子に報告をしたら、満足そうに微笑んでいた。プロジェクトの成功を確信したのだろう。

ユージン・スミスと別れの記念写真の中にもその表情があった。まだ妙子は三十そこそこだった。ユージン・スミスの写真を通して、日本のそして東洋の巨人としてH製作所が世界に紹介される一頁目が開かれようとしている。



六本木 材木町アパートにて、ユージン・スミスとの別れの記念写真（1962.9.18）
（中央列 右から中田、三木淳、ユージン・スミス、松田、キャロル）

ユージン・スミスの日本滞在はたぶん一年以上になっていたと思う。中田は一流を学んだ。

H製作所の写真を数千枚は撮っていた。写真はH製作所の卓上カメラや写真入りのダイアリーなどのPR用品にも使用された。妙子の好みで一流のインダストリアルデザイナーの柳宗理にそのデザインが任された。

今は亡き仏文学者、瀬底女史がPR誌での大特集も組んだ。東洋の巨人の出番は刻々と近づいてきた。

ユージン・スミスが帰った直後、妙子も渡来した。いよいよアメリカでの戦闘が開始されると中田は思った。それから二ヶ月以上もたつて妙子は、大きなお土産を手にして凱旋帰国を果した。

「ライフ」インターナショナルの表紙を見て驚いた。「GIANT・OF・THE・ORIENT」(東洋の巨人)の文字が踊っていた。カラーで十五頁にわたるH製作所大特集が組まれていた。今の広告費に換算したら数十億円は下らないだろう。大成功だった。

東京オリンピックでも「東洋の魔女」が金メダルを取り、世界中を湧かせた。

その後、妙子はアメリカ文化の紹介のためか、日本ホームズという住宅会社を設立した。中田も逗子に購入した。

松田竹千代は衆議院議長を務めた後に、ベトナムの戦争孤児救済の途へ、ユージン・スミスは水俣の旅に出た。

妙子の「ラブミー」の巨大な力に魅了されて、中田は二十五歳でハリウッド映画PRの会社を設立した。そして四十年余が過ぎていた。

二〇〇九・九・一一。中田は松田妙子を訪ねていた。大病のためここ数年の御無沙汰を詫びると共に、回復状況を報告するために。そして六十七歳にして初めて挑戦した小説「牧場の外へ」を届けることが目的であった。

妙子が七十二歳で東京大学工学博士号を取得したのに見習って、中田も新しい世界、小説家を目指すことを報告したかった。気がついたら、五十年近く松田妙子の教えを受けてきた。報恩感謝の気持ちを伝えた。

事務所内にある神棚に参拝しておみくじを引いた。「大吉」だった。中田の気になっている事「病氣(やまい)、神と医師(いし)を信(しん)じましょう」とあった。両方共信じているから、もうすぐ元気になるだろうと思った。

妙子からも元気を貰った。余命は延びた。感謝の気持ちを残して妙子のオフィスを出た。

虎ノ門の文科省の上の空に虹がかかっていた。虹の後方に松田竹千代の優しい笑顔、ユージン・スミスの笑顔が浮かんだ。

中田は交差点の手前で黙祷を捧げていた。